

絶望の精神史

映画文学人生論

金子光晴 (1895-1975)

『絶望の精神史』(1965) 「光文社」

『こがね蟲』(1923) 「新潮社」

『日本人の悲劇』(1967) 「富士書院」

竹川弘太郎『狂骨の詩人金子光晴』(2009) 現代書館

絶望の姿だけが、その人の本格的な正しい
姿勢なのだ

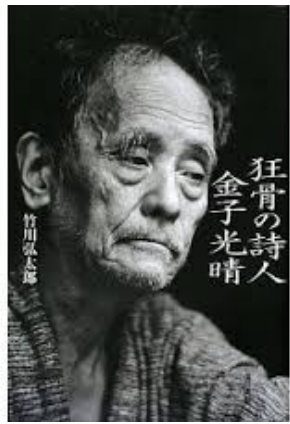
『絶望の精神史』は金子光晴という国際的放浪詩人が綴った絶望の精神の書。黒船来航以後、明治、大正、昭和の日本人が経験した絶望だ。

表面は恬淡(てんたん)として無欲な日本人、無神論者の日本人だが、その反面、ものにこだわりの、頑固でうらみがましく、他人を口やかましく非難したり、人の世話をやくのが好きな日本人。

そんな日本人の絶望である。本書の執筆時期は昭和五十年。日本が敗戦から立ち直り、奇跡的な経済復興をなしとげた頃だ。日本人の美点は、絶望しないところにあると思われてきた。「だが、僕は、むしろ絶望してほしいのだ」と、詩人はいう。「絶望の姿だけが、その人の本格的な正しい姿勢なのだ」。

たとえば、大正十二年の関東大震災を経験した世代の日本人は、運よく生きのびると、絶望を忘れてしまった。昭和二十年の敗戦を経験した世代の日本人も。忘れてはいけないのだ。日本人の誇りなど、たいしたことではない。

その通りだと思う。そもそも人間に死のあることが、だれもが持っている絶望と言わねばならない。『死に至る病』で知られるデンマークの哲学者キェルケゴールは、「死に至る病とは絶望である」と言った。来世への希望がないかぎり、死は絶望につながる。



絶望の精神史

映画文学人生論

キエルケゴールは日本人ではない。絶望は日本人だけの問題ではないのだが、金子光晴は、島国日本の孤立した地理的条件と湿潤な風土がかもしだす、抑圧された精神の異常な発酵に着目し、日本人の絶望について語った。エトランジェ（国際的な放浪者でありながら、日本が好きなのだ。といても、非道な戦争を強行する軍国政府の

国に対する単純な愛国者ではない。息子を無理矢理病体にして徴兵を逃れさせたことがある。一種のひねくれた愛国者なのかもしれない。

革命を叫ぶ左翼でもなかった。「有島武郎や芥川龍之介のような、正直で神経のほそい連中をおびやかして死に追いやったいたずらものの左翼さんはなにをしているのだ」と書いている。

単純な家族愛の人でもない。二歳のとき、金子家の養子となったが、欧州や東南アジアを放浪して財産を使い果たす。詩人の森三千代と結婚したが、お互いに愛人をつくり、『絶望の精神史』を上梓した年に、三度目の離婚届を提出した。最終的には三千代の婿養子になった(?)という。

詩人は、絶望しながら絶望と戯れ、絶望という死に至る病との一病息災で、八十歳まで生きぬいた。有島武郎や芥川龍之介と比べると、やわな神経の持ち主ではなかったとはいえる。

死人とおなじものになりはてて、猶、生きつづけている毒臭だ。その背から滲み出て腐蝕（むしば）む陰湿。

金子光晴